

〈講演録〉

日本社会福祉学会中国四国地域ブロック 第54回島根大会  
基調講演「人口減少時代の地域再生」

島根県立大学 田中輝美

基調講演

○司会 それではよろしくお願ひいたします。

○田中 今ご紹介いただきました田中輝美と申します。あらためまして皆様、こんにちは。

今日は足元の悪い中、大変だったと思いますが、こうやって足を運んでいただいて、こういう機会をいただけたこと、本当にうれしくありがたく思っております。

今日はテーマとして、「人口減少時代の地域再生」ということをお話させていただきます。その中でも関係人口、私が専門としている研究の中の、関係人口、この後もお話するのですが、社会的には「よそ者」ということになりますので、「よそ者」に着目して「人口減少時代の地域再生」をテーマに話をさせていただきます。

先ほど、ご紹介いただいたのですが、私は元々島根県の浜田市、ここから120kmぐらい離れた西のほうにありますけれども、そこで生まれ育ちました。大学は当時、仏像が好きな変わった高校生で、絶対関西に行こうということで、関西では寺まみれ仏像まみれの幸せな4年間を過ごしたのですが、就職の時に仏像よりも人間のほうが面白いかなと気づきまして、人間相手の仕事をしようということでUターン就職をして、この島根県の地方紙である山陰中央新報社に勤務をしまして、その後独立をしてフリーランスで「ローカルジャーナリスト」という仕事をしました。

「ローカルジャーナリスト」という職業を初めて聞いた方もおられるかもしれないのですが、それもそのはずで私自身が作った名称です。山陰中央新報を辞めて独立する時にたくさんの人から「東京へ行くんだ、頑張ってるね」と言われて、「いやいや私は東京に行くんじゃない、ここの島根に居ながら島根のことや地

方のことを書いていくんだ」と言ってもなかなか通じなくて、調べたらやっぱりほとんどのフリーランスの方は東京にいたので、「ジャーナリストって東京の仕事みたいなイメージなんだな」と思いました。そうではなくて地方で暮らす、生きるジャーナリストもあっていいのではないかなということで、自分で名称をつくりました。しかし、やはり学術をきちんと勉強しないと今の複雑化された社会をとっても表現できない、執筆していけないなと思って、もう一度大阪大学人間科学研究科で大学院修士に入りました。吉川徹先生という松江南高出身の先生のところへ学ばせてもらったのですが、そのまま博士に進んで、関係人口ということテーマに博士論文を書きまして、それが「関係人口の社会学」という本にもなっています。

今、島根県の浜田市にある県立大学の地域政策学部に勤務して本当に故郷に帰ったので、いつかは石見、浜田市に帰りたと思っていましたので、本当にうれしく思っているところです。

こういう経歴をお話したのも、今日来ていらっしゃる皆様と違って、本当にずっと学術研究してきたというわけではなくて、そういう意味では現場よりの立ち位置ですので、いろいろ甘い点もあるんじゃないかなと思っていますが、せっかくの機会なので一生懸命お話したいと思っておりますので、よろしくお願ひいたします。

今日は簡単にご挨拶代わりに簡単なクイズをしてから、「関係人口とは何か」というお話、そして「よそ者と地域再生」についてのお話をしてから事例、分析でまとめ、最後に人口減少時代の地域再生ということでお話をしていきたいと思っております。

今日は学術研究の方にクイズはどうなのかな

と思ったのですけれど、これは私が関係人口の講演をする時に大体一般の方に対してやっているクイズですので、それを体感していただく感じで思っていただけるといいかなと思います。大体関係人口の講演をしてくださいと頼まれた時に、一般の方に対してやっているクイズです。

突然ですが、「メンバーの減少に直面するチームにいるとしたらあなたはどうか対応しますか？」というクイズをします。

今日は当てたりはしませんが、ご自身の心の中でどうしようかなって思っただけで見てもいいかなと思います。普段、当てて「どうですか」「どうですか」と言って場を和ませるというか、あと寝ないようにそういうのもやって場をほぐしてやっています。

ほとんどの方は「メンバーの獲得に動く」ということしか言われません。まあそうですね、分かります。ただ、「人口減少時代とか全体にパイが増えない」ということを話して、そういう前提があったらどうしますか？という「うー」となるんですけど、その時に業務量を減らすとか、ITで今はやっているDXというChatGPTで効率化するのがありますよね、みたいなこととお話ししつつ、ただこれから今日お話しする「関係人口」という考え方は、そういう時に外の仲間と協働する、地域に当てはめた時によそ者、関係人口ですね。関係人口という分りにくいと思うのですけれど、これから地域づくりをやりたいと思っている皆さんに当てはめた時に、外の仲間、よそ者と協働する。そういうことだと思ってくると少しは分かりやすいんじゃないかなと思います。

多分、今日の皆様もそういう学術的な背景をお持ちなので、こういう言い方は最初にしなくてもいいとは思いますが、本当に分りにくいって言われるんです。関係人口とか、よそ者とかは本当に分りにくいと言われるので、少しは分かっていたらきやすいようにと単純化してこんなふうには話しています。

そういうことでここから研究発表のようにやっていきたいと思っています。

## 関係人口とは

最初は関係人口とは、という定義のお話をまずさせていただきます。

関係人口は、2016年頃から出てきた言葉ではあるのですが、あつという間に、当時の安倍首相が「関係人口の創出拡大によって地域が良くなる」ということを、政府の立場で言われたり、「関係人口で地域を存続、活性化」というように言われたり、期待が高まってきたというところがありました。

ただ、そういうことに対する批判もありまして、大きなものの1つは、定住人口という今まで移住・定住と言われるような、移住してください、定住してくださいということを自治体が一生懸命やってきたわけですけども、そこがうまくいかない。うまくいかなかったからそれを隠すために関係人口と言ってるんじゃないかという批判がありました。

初めて今使われるような文脈で関係人口という言葉が出てきたのは2016年に最初のこの2つの著書になります。

東北食べる通信の元編集長の高橋博之さんという方と雑誌ソトコトの編集長の指出一正さんの本でそれぞれ関係人口という言葉が出てきます。

私はよく提唱者みたいに言われることもありますが、そこは明確に「違います」と話をしていて、このお2人の著書の中で関係人口という言葉があったので、本当に面白い考え方だと思って、その後中心的に研究してきた部分もあるのですが、最初におっしゃったのはこのお2人です。2016年以前はこういう形で使われた関係人口という言葉はなかったもので、やはり2016年頃に生まれた新しい言葉ということができます。

その後は、私や総務省そして農業経済分野になりますけれども、小田切徳美先生を中心に研究してきたという流れがあります。

ただ、なかなか定義が曖昧で、新しい言葉なので混乱もしてきたというのもありまして、例えば、「代表的なのは緩い関係というのを持っている人たちのことだよ」とか、「なかなか地域に関わる外部者が共通要素だけれども、定義

はやっぱり曖昧だよね」というようなことが言われてきましたので、私のほうで社会学的な視点から、背景と定義と類型の3つを検討していきます。

### 関係人口の社会学

ここから主に関係人口の社会学に基づいてお話をさせていただきます。

最初の背景です。一番左側になります。主に先ほど紹介した5者が主に関係人口を論じてきましたので、5者の論を整理してはいますが、基本的には「ふるさと難民」と言われたり、「関わり価値」と言われたりしていますが、若い世代中心につながりとか関係性、人とのつながり、人との関係ということに価値を置く人が増えたということが一般的な背景として指摘をされています。

もう1つが情報通信技術ですね。インターネット、ソーシャルメディアを含めた情報技術が発達したこと、大きくこの2つが要因、背景として言われています。これを社会的に文脈に置き換えるとどういうことになるかということなのですが、つながりということ、社会関係資本を求めているということになります。

どうして社会関係資本と言いますと、社会学では個人のアイデンティ以外で捉えにくいものになっている。個人のアイデンティは、元々自分自身に与えられているものではなく、他者との関係性の中で自分でつくっていかないといけないということが指摘されています。そういう中で自分の大事なものであるアイデンティをつくる、確立していくために他者との関わりやつながりを求められていて、つながりということを社会的に言うと社会関係資本ということができるといことで、社会関係資本を求めているということがアイデンティにつながるということが背景の1つです。

もう1つが、先ほどの情報通信技術は社会的にはモビリティ、いわゆるアーリーが提唱している概念ですが、これまでの社会関係は基本的に近くにいることが大事なわけですが、今はインターネット、ソーシャルメディア

を含めて近くにいなくても、距離を隔ててもつながりがつくれる。

この2つが関係人口の背景として指摘をされています。

### 関係人口の定義

続いての真ん中の定義になります。

定義は曖昧だと言われているとおり、いろんな方がいろんな地域に関わるみたいなことでまとめられることが多かった中で、小田切先生が地方部に関心を持ち、関与する都市部に住む人々という定義を一番厳密な形でしておられます。

これは実際、総務省も引き継いで、「関心」と「関与」の2軸が必要だというふうなことが言われています。

ただ、小田切先生の「地方に関心をもち関与する都市部に住む人々」という定義はもちろん厳密で、すごく良い意味があるとは思いますが、こういうふうな定義をしてしまうとどうしても都市に住んでいないと関係人口ではないということになってしまっていて、逆に都市部に関わる人たちも想定されるので、こうして地方と都市論だけの枠組みで考えてしまうことはやはりもったいないと思うところもありましたし、都市と地方論だけではなくて、もう少し社会学全般の中で定義を考えていきたいと考えまして、関心と関与というのが大事だと思い、時間、定住長期でも交流短期でもない存在だということ、中期だと別なイメージになるのかなということ、継続的という言葉を採用しまして、「特定の地域に継続的に関心をもち関与するよそ者」という定義を私は考えました。

### 関係人口の類型

続いては類型です。こちらもいろいろ関係事項、行動に着目したり、タイプで分類したりいろいろあったのですが、特に社会的な観点から「空間」と「移動」から4つの類型を私のほうで整理をしました。

1つは、1番の「来訪型」です。1つの集団から我々の集団にやってきて帰っていく。これは一番想像しやすいパターンではないかなと思

います。

続いて「風の人」です。私がこれまでの著書の中で定義していますが、厳密には「他集団から訪れて一時的に居住し、別の多集団へ移動する」ということです。来訪型はほとんど集団に帰るのに対して、最初来た集団がまた別にある、住んで、また別の集団に行くというような形ですね。現代では増えているなと思っていますけれども、そういう形を1つ分類しています。

3つ目が「2拠点」です。それぞれが1つの集団と別の集団と2つに拠点を持って行き来をする人たちです。

4番が、「非身体的移動」です。これはアーリーが5つ移動の形を分類してるんですけども、例えばモノの移動とかマスメディア上のイメージを通して行われる移動とか、そういう5つの分類のうちの身体的移動以外を除いた総称ということでこのように分類をしています。

## 関係人口と地域再生

続いてこうした定義した関係人口とかよそ者や地域再生ということがどういうふうに語られてきたかということ整理していきたいと思えます。

よそ者自体は社会学の中で本当に古くから重要なテーマになっていまして、もちろん海外でも、国内でも、文化人類学、民俗学、経済学とか様々な学問分野で話をされてきたのですが、ただ地域再生とよそ者という主題で扱った研究はあまりなかったと言われてます。

そういう中で一番、敷田先生が数少ない地域再生におけるよそ者の役割ということ明確に主題化して分析をしておられます。

そういう中でもよそ者とは何か、ということなのですが、いろんな特性としてある1つは、これは民俗学の赤坂先生の論ですけども、漂泊と定住の間を生きる存在と言われたり、あとは近さと遠さのダイナミクスと言って、近くもあり遠くもあるという両義性を示す難しい存在であるということも指摘はされています。繰り返しになりますが、こういうよそ者と地域再生がどういう関係なのかということを研

究したものは今までなかったということで、唯一に近い敷田先生の研究の中で、よそ者と地域再生ということが主題化されています。

それが一番重要な先行研究ですので、少し詳しくお話しますと、よそ者というのは「同じ地域や空間内部にいる関係者ではない異質な他者」という定義と、「地域住民とよそ者の関係による関係概念」ということで、よそ者はそこにいるから固定的よそ者であるということではなくて、地域住民との関係によって変わってくる。そういう意味で「よそ者性」というのもグラデーションがあって、低いよそ者性の高い、低い高いというのは関係によって既定される概念であるということが言われています。

その上で、地域再生で考えた時には5つのよそ者効果と3つの相互作用形式が考えられると敷田先生はおっしゃっています。

5つのよそ者効果というのが、1つは「地域の再発見」で、地域を新しくもう1回発見する。次が「誇りの涵養」で、この地域はいい地域だなということを感じさせてくれる。3つ目が「知識移転」で、新しい知識を移転する。4つ目が「地域の変容促進」。5つ目が「しがらみのない立場からの問題解決」で、地域住民に対してこういう効果をよそ者はもたらすよということを発言しておられます。

大事なのは、どういう効果かを分析するというよりは、これがどうやって発現しているのかということがポイントだと言っておられて、そこが相互作用形式で、どういう住民とよそ者の関わりによってその効果が発現するのか、そのパターンとしては3つあると言われてます。

1つが「地域の自給自足主義」ということです。これはよそ者と関わらないという方ですね。これでは効果はあまり生まれません。2つ目は「よそ者依存」です。よそ者のほうが強くて、何でも言ったとおりになる。専門家のタイプであると言われてます。敷田先生は3つ目の「よそ者活用」。よそ者を地域が活用していくという相互性の形式によってこの効果が生まれるのではないかという説を立てておられます。

これを基に私も実際の事例でこれらがどのように発現するのか、どのような効果があって、どのような形で発現するのかということのポイントに置きながら、実際の事例で検討していきました。それが3つ目の事例ですね。

基本的には島根県の海士町と島根県の江津市という隠岐郡と県西部にある2つの町の地域再生について先ほどの分析を当てはめて考えていきます。

まず海士町からです。海士町は隠岐郡の中の島後と島前に分かれています。その中で島前地域の小さい島の1つである中ノ島という島があります。日本海の島根半島960kmという島で、本当に離島になっています。2015年の段階で人口は2,353人で、1950年から比べると3割の水準まで減少した典型的な過疎の島です。

そういう中できっかけの1つとして、2002年の町長選で負けると言われていた新人が当選したということが1つのきっかけになっています。

その後1つのクラスしかなくて廃校寸前だった県立の高校を魅力化する、「高校魅力化プロジェクト」というものが始まりまして、それに関係人口と地域住民が取り組んで1つ成果を上げたということで今回紹介する地域再生事例になっています。この後、Uターンをする卒業生も生まれているという事例です。

最初に「高校魅力化プロジェクト」というのは廃校寸前の高校の状況なのですけれども、一番少なかった時、2008年には、どんどん生徒が減ってきて、この時入学者は28人で全校でも100人を切りました。教育委員会の指針では20人を下回ると廃校にしますという基準が決められていたので、議会の中ではいよいよ統廃合しかないのかという諦めの声もあったと聞いています。その後2008年を底にどんどん増えていって、今は100人を超えて180人ぐらいになっています。現代の人口減少社会において、こんなふうにV字回復をしている高校とか、高校でなくても事例というのはそんなに多くはないのです。とても注目をされている。なぜこういうことが実現したのか、生徒数が回復して、1クラスだったのが今全学年2クラスになりました。

本当に珍しいので、これがどうして起こったのかということがよく言われます。

どういう人が関わっていたか。先ほど関係人口と地域住民の協働でということをお話したんですが、ここから登場人物が増えますので、整理しながら覚えてほしい人だけ強調してお話をします。

この海士町の登場人物は一番上の岩本悠さん。この方がやってきた関係人口、「風の人型」の人です。海士町にやってきて今は松江市におられますけれども、東京から来て海士町に住んで、松江市にいるということで風の人型の関係人口、この方はこれからも登場する重要人物です。覚えておいてください。2006年に移住して、2015年まで9年間過ごして、この方が主力で「高校魅力化プロジェクト」を担当しました。島根の方は大体知っておられると思います。

もう1人の重要な登場人物は浜板健一さん。教員の立場で地域住民である教員の立場として、「高校魅力化プロジェクト」に加わりました。基本的には岩本さんと浜板先生の話をしていきます。

もう1人のキーパーソンとして3人目、尾野寛明さん、この方は「来訪型」で、当時東京の大学院生だったんですが、岩本さんを連れてくるきっかけをつくって、海士町に通いながら、住んではいないですけれども東京から海士町に通って重要な役割を果たした関係人口の来訪型ということになります。

この3人を中心に話をしていきます。とはいってもこれは関係図になるのですが、岩本さんが海士町役場と島前高校とをつなぎながら、中心的にやったことです。尾野さんが連れてきた岩本さんを紹介して、海士町の関係人口になります。浜板先生は高校にいて、一緒にプロジェクトをやって、もう一人海士町役場の吉本さんが入って、この3人でプロジェクトが進んでいたので、これからは岩本さんと浜板さんを中心に話をしていきます。

大きな流れで言うと、最初に吉本さんという役場の方が島前高校の存続問題に直面して、尾野さんの紹介で岩本さんがやってきて、浜板先

生も高校にやって来て3人のチームができて、2クラスになっていった。大きくはこういう流れになります。

でもその岩本さんがどのような方だったかということです。最初、東京出身で東京の企業に勤めていました。岩本さんは、関係人口として紹介されて海士町に来たのですが、吉本さんという役場の方から、廃校寸前の高校の存続を相談されて移住を決めました。移住を決めたというと「何で」と思われると思うのですが、理由を本人はこう話しています。

「この島の課題に挑戦し、小さくても成功モデルをつくることはこの島だけでなく、他の地域や日本、世界にもつながっていくということで、自分自身やはり高校の教育問題に興味があったということ、この島にゆかりはなかったですけどもここの課題に挑戦してモデルをつくっていけば、他の地域や日本にも波及するだろう」と、社会課題に対して興味があったということになります。

その後、そういう役場の人からの助言を、最初は「ファシリテーター」とか横文字を結構住民に対して使って説明していたのですが、でも、「そんなん通じんけん」と言われて、「そうですね」って横文字をやめて日本語で話すようになったりとか、元々お酒とかたばこも好きではなかったのですが、飲み会に参加したりたばこ部屋に行ったりして、教員と信頼関係をつくっていきます。

一方で、役場の吉本さんにも海外の理論を教えて、「成功の循環モデルというのがあるんですよ」とか言ってお互いに学び合いをつくっていった。

岩本さんがやった一番大きいことは、なぜあんなに生徒が増えたのかということ、端的に言う外からも生徒が来るようになったということになります。今まで島の中にしか生徒、出身者しかなくて、だから減ってきたのですが、それに対して「外から来ればいいじゃないか」と言って、「そんなの中の生徒ですら松江に流出するような高校だったのに外からなんて来るわけないよ」と言われていたのを、「いや

いやできるよ」ということで提案して、それを外から生徒を呼ぶ制度、「島留学」と言いますけれども、誰もできるとは思わなかったことを「できる」と考えて提案したということは大らかな岩本さんの1つやったことになります。

最後になりますが、海士町とつながるきっかけが、先ほどの関係図にあります尾野さんがつないでくれて、移住をしたということになります。

続いて浜板先生ですね。地元住民であり教員の方ですけども、浜板先生は、やっぱり最初は警戒していて、「高校魅力化プロジェクト」って何なんだと言われていました。本当によく分からない。教育から見たらあんまり共感できない。何を言ってるんだという感じで、プロジェクトにもかなり否定的だったと本人が言っておられました。

ただそういう中で、この人は何なのかと遠巻きに見ていたのですが、先ほどの岩本さんは自分で努力をしてお酒の場に来たり、たばこを吸ったり雑談にも粘り強く付き合ったりと一生懸命信頼関係をつくっていく姿を見るうちに、「この人信用できるな」というふうになっていって、「教頭先生に話すのは大事だから」とかあまり明文化されてない文化とかを伝えたりして話を進めやすくする環境をサポートしました。そのうち、主体的に自分をプロジェクトの一員であるというように動くようになっていきました。

どういうふうに行っているかということ、岩本さんに対して「岩本さんはプロだな。身を削ってでも目的のためには徹底的に努力する。俺にはできない」ということで、岩本さんに対してすごく信頼を寄せて一緒に頑張っていこうとも思っていました。

その結果、先ほど役場の吉本さん、関係人口の岩本さん、浜板先生の3人のチームができて、「島留学」という外から生徒を呼んでくる仕組みを勧めて、町が出資をして学習センター、大学に行く進学支援というセンターもつくりました。どんどん3人で構想し、実行に移して行って成果を出していく。その結果として、生徒数が増えるということになったという

ことです。

もう1人の尾野さんについても簡単に関係人口として紹介しておくのですが、尾野さんは東京在住の大学院生で相談を受けたりする中で、「どうしようか」と考えている中で、「岩本悠さんがいい」、「岩本悠さんを移住させよう」と思って一緒にツアーに連れて行って、実際移住につなげたというなかなかのキーパーソンです。適任であると狙いをつけて連れて行ったということで、役場の方の思いも聞いた時に、「岩本さんしかないな」と思って連れてきた。ということで、その後連れてくるツアーは終わってしまったんですけど、それによって岩本さんがやってきたという大きなきっかけをつくったということです。

以上が海士町の事例になります。

もう1つの事例が、島根県西部の、私が住んでいる浜田市の横ですが、江津市というところになります。

島根県西部にあって、役場のwebサイトにも東京から一番遠い市ですよっていう珍しいPRをしている面白い市です。JRで換算した時に一番時間がかかるということで教科書に載ったことがあるらしくて、市自らが、そんな町でも「今面白くなっているんだよ」みたいなことをPRしています。人口は24,000人ぐらいで、これは1950年から6割ぐらいまで減っているということで、ここも典型的な過疎の町になります。

以前は企業誘致、工業地帯で工場がたくさん建てていて誘致企業がたくさんあったんですけども、撤退をしていったことでJRの江津駅前がシャッター通り商店街になって、本当に廃虚のようだと言われていました。

でも今は起業家誘致を目指すビジネスプランコンテストやイベントを地域住民と関係人口が一緒になって開催して利用できる空き店舗が全部埋まったというようなことで、こちらは経済産業省も注目して、なかなか現代でシャッター通り商店街が蘇るといのはそんなに多くないので、1つの事例として注目されています。

こちらの登場人物は田中理恵さんという関係人口、風の人と藤田貴子さんという地域住民の

方の2人になります。

田中理恵さんは2011年に江津に移住してきて2年間過ごした後で、そこではこの後話す「てごねっと石見」というNPOのスタッフとして働きます。元々安来出身でしたので安来から江津に来て、江津からまたその後別の地域に移動していきましたので風の人ということになります。

藤田貴子さんは地域住民の1人で、廃虚と言われていた商店街の中でお店を持っている商店街の会員の1人。NPO「てごねっと石見」の理事をやっていました。

もう1人実はキーパーソンとして出てくるのが、先ほどの海士町と同じ方ですが、尾野さんは東京と2地域居住しながら、「てごねっと石見」、こちらのすぐ近くのところに仮の拠点とか住みたいのを持っていて、江津から見たら2地域居住者のように見えていたので2地域居住者も関係人口というふうに私としては定義をして進めています。

こちらの関係者は全員「てごねっと石見」NPOの関係で、尾野さんは先ほどの海士町にも関わっていて、「てごねっと石見」にも関わっていて、藤田貴子さんという地域住民が理事をやっていて、その中のスタッフとして関係人口の田中理恵さんがやってきたというそういう構図になります。

起こった出来事としては、この後にお話する江津市のビジネスプランコンテスト、2010年に開かれたことがとても大きい。その第1回の2010年のコンテストで田中理恵さんが大賞を受賞して、そこで移住してきて、「てごねっと石見」で働き始めたというのが最初です。

その後、その年かな、「手つなぎ市」というのを藤田貴子さんと田中さんと一緒に開催をして、そこから江津が盛り上がっていったということで、その結果どんどんイベントを重ねていって空き店舗が埋められているという流れになります。

田中理恵さんってどんな方かと言うと、田中理恵さんは切ない話でお兄さんが自殺をされています。何でかと言うと、もちろん色々な要因はあったんですけども、県外の大学に出られ

て、エリートコースだと言われていたお兄さんが実家の環境で、長男だということで島根に帰ってくるとなった時に、周りの方から「島根に帰って、そんな田舎に帰って何が面白いのか」というようなことも結構言われて、もちろんそれだけではないのですけれども、それが大きな理由の1つとしてやっぱり亡くなってしまったという経験があって。帰って来れる、お兄さんを含めて皆が堂々と帰って来れる島根をつくらないと兄は報われないということで、「帰って来れる島根をつくろう」というキャッチコピーを掲げてビジネスプランコンテストに応募してきました。そこで大賞を受賞し、本人としては経験させてもらおうと思って来たのですが、実は全然何もなくて、「てごねっと石見」もまだ始まったばかりで、まず電話線引いてくださいみたいなどころから始まったということでびっくりしたということをおっしゃっています。

ビジネスプランコンテストを最初運営しながら、「手つなぎ市」という最初のイベントを地域住民の藤田貴子さんと一緒に開催をしました。最初だったのですけれども市内外から600人訪れたのですね。そういう廃虚と言われたような江津にもちゃんといいイベントをすれば人が来るんだということが共有されて、すごく大きなきっかけ、力になっていったと言っています。

その後、江津にわざわざ行く人が増えたのです。「視察も含めて江津に飲みに行く、会いに行く、やっと私の思惑どおり」と言っています。江津の町を面白くしたいということで一生懸命動いていたということです。

実は元々江津に行くってことを迷っていたのですが、先ほどの岩本さんを連れてきた尾野さんに背中を押されて江津にやってきた。ここでも尾野さんは重要なキーパーソンとして働いています。

続いては地域住民の藤田貴子さんですね。商店街の会員で商店街で商売していたのですが、手つなぎ市を開催したり、誘導してとにかく先ほどの田中理恵さんが江津のためと言って

一生懸命動く。それを見てすごく心が揺さぶられて自分もやっぱりそうやってある意味よそ者、関係人口のよそ者の田中理恵さんが一生懸命動いているのを見て、地元に住む私たちも何かしたいと、私たちこそ頑張らねばということをおっしゃって、手つなぎ市を開いたり、その後田中理恵さんは2年間で去って行ったわけですが、その後も藤田貴子さんは弟さんがニューヨークで空間デザインを手がけておられて、「今、江津が面白くなってくるんで帰ってこい」と無理やり帰らせて、その弟さんがまたビジネスプランコンテストに出てきて大賞を受賞して、空き店舗をリノベーションして行って、そうやってこういうふうにもリノベーションして空き家って活用できるんだって動きが広がって行って、地域住民も「こういうふうにもできるんだ」と言ってリノベーションしていくということで、そういう相乗効果、波及効果がどんどん生まれて空き店舗が埋まっています。

藤田貴子さんはどういうふうにおっしゃっているかということ「ヒーロー」。特に関係人口のことです。「ヒーローは居続けられないので、地域住民の自分たちがやらないといけない。ヒーローのおかげで自分たちが変わった。やったらできると分かった。」と明確におっしゃっています。

もう1人の尾野寛明さんですね、海士町に続いて登場してくるわけですが、2地域居住しながら江津市に助言していた立場でした。ビジネスプランコンテストというのも実は尾野さんが提案して「やってみたらどうか」と言ったり、あとは田中理恵さんですね。田中理恵さんは東京でも就職が決まっていた、1回東京に出ようか江津に行こうかと迷っていた田中理恵さんに結構厳しい言葉で、「修行、修行といって学びに快感を覚え、現場に出る機会を失った人を山ほど見えています。」というメールを送られたそうです。だから江津にいたほうがいいのかと相談した田中理恵さんして、「修行しててもしょうがない。だから現場に出る」と言って背中を押したという逸話が残っていますが、これを見た田中理恵さんは東京ではなくて江津

で修行することを選んだというストーリーになっています。

### 関係人口の分析

以上を踏まえて、これから分析をしていきたいと思いますが、まず敷田先生のおっしゃっていた5つの効果ですね。他の事例ももうちょっと細かく入れているので、関係したところだけ話すと、岩本悠さんのところで特に言うと、高校魅力化を構想し実行した。特に「島留学」ですね。これは例えばやっぱりしがらみのない立場からの問題解決。やっぱり誰もできるとしてなかったところを、「いやいや人が減っているんだったら外から呼んでくるしかないんじゃないですか」みたいな感じで、正論ですねある意味。それはある意味普段の生活、日常の中で当たり前になっている常識ではないところから提案して問題解決したってということで、1つやっぱり「よそ者効果」が発揮された例ではないかと思えますし、あとは田中理恵さんで言うと、手つなぎ市の開催をしてそうやって地域が変わっていくきっかけをつくった、あの地域の変容を促進したということだったり、他にもいろいろ。尾野寛明さんで言うと、江津ではコンテストをやったらいいですよということで新しい知識を移転する効果を発揮していたり、海士町でも岩本さんを連れてきて、若い人を連れてくるイベントをやっていて。しがらみのない立場からの問題解決みたいな、その他の文献調査も含めてですね、いろいろ海士町と江津市では5つの効果、それぞれが発揮されていたのではないかと分析をしています。

ただ、例えば岩本悠さんと一緒にやっていた浜板先生が主体的になっていき、田中理恵さんの動きを見て藤田貴子さんが「地元に住む私たちも何とかしなきゃ」って言ったような、そういう声を受けてこちらも主体的に変わっていった。そういうことがすごく大きな効果だと思ったのですが、それを5つの効果には分類できないのではないかなと。5つの効果ではないまたもう1つ別の6つ目の効果があるんじゃないかと思いました。

それが私の分析、提案なのですけれども、6つ目は「地域再生主体の形成」というふうに分分析をしています。

海士町では岩本さんに影響を受けた浜板先生ですね。江津市では田中理恵さんに影響を受けた藤田貴子さんが、それぞれ今までは地域課題に関わる当事者となっていたわけではないのですけれども、主体的に地域づくりに関わるように変容していった。これは本当に岩本さん、田中理恵さんという「風の人」と関わった、関係人口と関わった効果として考えられるのではないかということで。そういうのは地域を再生する主体ですね。地域の課題を当事者として認識して動いていく人たちのことを「地域再生主体」と言っていますけれども、それを形成するというそういう効果を発揮したのではないかと分析をしています。

この図は、プレイヤーは外に住んでいるか中に住んでいるかっていうことと、地域の再生主体と見た時に上にいる人たちが地域の課題解決する当事者、地域再生主体だとして、そうでない人たちに分類をした時に、最初は地域で言うと吉本さんしかなくて、途中で登場してきた浜板先生と藤田さんというのは中には住んでいるけど地域の再生主体ではなかった人たちですね。そこに外から岩本さん、田中さんというような関係人口が最初やってきて、その中でこちらに移って行って地域再生主体として動いていった。その結果、ここに相互作用が生まれてこちら側にいた浜板先生とか藤田貴子さんも地域の再生主体として動いていったということで。こういうふうには、この後の話にもつながるので、人口減少時代は人口が減るといことは避けられないのですけれども、こういうふうには人口は減っていても、海士町も江津市も人口は減っているわけですが、地域再生主体が増えるということは可能であるというふうには考えると、人口は減っても地域再生主体は増やせるし、そういうことで地域課題の解決につながっていくと考えています。

大事な相互作用形式ですね。敷田先生は「活用」と言っておられてたのですが、もう少しブ

ラッシュアップする必要があるのではないかなと思っています。活用というどうしても一方の強い側が、もう一つの主体と客体って言い方をすると、主体が客体となった場合、その名のほうを活用するというような、主体と主体の対等な関係ということにはなりにくい概念と考えたことがあります。もう少し詳しく見ていっても、海士町では吉本さん、役場の方が岩本さんから海外理論を教わったり、江津市でも藤田貴子さんが田中理恵さんと協力してイベントを開催したりということで、相互作用形式で依存して自分たちがやらないとなるのではなく、関係人口の主体性を奪って活用するって姿勢でもなくて、「共に主体性をもって対等に向き合う姿勢」と考えていいのかなと。そうなった時に、活用という単語よりはよそ者と対等な立場で協力して共に働く「協働」という相互作用形式ではないかということで、新しくよそ者との協働による地域再生ということを提案しています。

以上を踏まえて、事例からの示唆をいくつかお話ししたいと思います。1つは「関わりしろ」と言われる関係人口が関わるきっかけ。きっかけがないと関わらないので、関係人口の創出、生み出されるためには「関わりしろ」ということが大事だと言われているのですが、この「関わりしろ」は海士町で言うと高校の存続だったり、江津市だとシャッター商店街の再生だったり、むしろどこにでもある地域課題ということで。よく魅力の発信というように言われるのですけれども、実は「関わりしろ」は地域課題のほうが生まれるのではないかということが1つです。でも大体の課題は、弱みだから見せにくいとよく言われますが、バルネラビリティという言い方で脆弱性ということですが、弱さであると共に相手から力をもらう窓を開けるための秘密の鍵とも言われていますし、弱さの強さですね。ということで、実は課題のように見えるけれどもそこから相手とつながる1つのきっかけになるというふうにも考えることもできるということで、実は地域課題こそが「関わり指導」になるというふうには事例から1つ言えるかなということ。

もう1つ、このよそ者がスーパー人材でなくていいですし、少なくてもいいということで、岩本さん、田中理恵さんですね。本当に若い1人の人間という感じで、特に横文字を使って怒られたりしていたわけですし、田中理恵さんも何かスキルがあって来たというよりは電話線を最初から引いてちょっと一生懸命頑張ったみたいな感じで。それぞれ着任した時はとてもスーパー人材という感じではないのですね。本当に若くて一生懸命な若い人という感じで、でも今、成功事例になっているのでどうしても「やっぱりスーパー人材だったんでしょ」って言われるんですけども。着任当初は本当にスーパー人材ではなくて1人の若者でしたし、それを浜板先生だったり藤田貴子さんだったり地域住民と一緒に育っていく中で成功事例になっていって、スーパー人材のように見えるようになりましたけども、決して彼ら・彼女らがスーパーだったからこうなったのではないと思っています。

よく「関係人口を増やそう」という議論も行われるのですけれども、地域課題に関わって一生懸命一緒にやるということが大事なので、数が増えればいいということではないと。この事例を見ても数が多ければいいとか、スーパーな人材が欲しい、スーパースキルの人材というのではなくて、もう少し一緒に協働しながら育ち合うこと、少数の人たちとそういう関係を築くということのほうの方が大事ではないかと思っています。

### 関係人口の現代的意義

後は現代的意義ですね。特に尾野さんの、わざわざ尾野さんを出したのはこの部分です。尾野さんは海士町にも関わったし、江津市にも関わってそれぞれで別々の効果は発揮されています。

この人口減少時代ですね。どうしても「人口獲得ゲーム」と言われていまして。ただ全体が減る中で奪い合っても、誰かが勝っても誰かが負ける。全体が減りますので、そういうゲームのことを「ゼロサムゲーム」と言われるんですけども、どうしても定住人口はそういうゼロ

サムゲームになりがちです。しかし、尾野さんのようにあっちに関わりこっちに関わりということで、むしろ人材を奪い合うのではなくて地域間でシェアしているというふうにも考えることもできます。途中で申し上げたように、定住人口は減る、これはもうこの先見えているのですけれども、地域再生の主体は増やすことはできません。この先も日本の人口は減り続けるのですけれども、関係人口ははじめとしてよそ者も再生の主体にはなりません。そして今までなかなかこれまで関わってなかった地域住民に関わるようになるということで、地域住民の中でも新たに地域再生の主体が形成される可能性もあると考えています。

ただ、もちろんそんな簡単なことではないので、難しさももちろんあります。

1つ、「継続性」ですね。そうやって風の人のような形は確かにあると思うのですが、地域住民が寂しくないかということややっぱり寂しいということを言われますし、どういう仕組みが継続につながるのかということをもう少し丁寧に考えていく必要があると思っています。

あとよそ者の「両義性」ですね。遠くと近い、遠さと近さみたいなことを両立するのは多分すごく、ここはスキルというよりもある意味一種の難しさがあるのではないかと考えていて。関係人口が万能だというつもりもないとは思っています。

### 人口減少時代の地域再生

最後ですね。ここから今日の主題になってきますが、人口減少時代の地域再生ですね。

これは国土交通省が出している面白い図で、千年間の日本の人口のグラフです。急激に伸びているのは明治維新からです。このように急激に伸びている。あと新型コロナウイルスも一緒ですけれども、急激に伸びた後は急激に減る。私たちは減り始めたところなので、本当にまだ慣れないし、課題だと言われてはいますがけれども、もう減ることが当たり前、前提の時代になってきます。今、年間どれぐらい人口が減っているかと言うと、これも結構クイズで出すのです

けれども、住民の方に、「今、年間64万人減っています。島根県1つですね」と。島根県1つ毎年なくなるぐらい、この後もっと減る。今後、減少幅が拡大すると言われてはいますし、圧倒的に人口減少時代が来ているということになります。しかし、これまでどうしても人口の増加ということが目標とされて、みんな増やそう、食い止めようということばかり考えてきた。地域再生も地域活性化も一緒ですけれども、言葉としては、人口を増やそうとか、地域を維持しようということを基本的にあまり疑いなくゴールにしてきたと言われてはいます。そこ自体を、もう少しあれほど人口が減る前提に立った時に、それでいいのかと。人口が増えるとか、地域が維持されるっていうことを地域再生のゴールにしていいのかということを実際に考える必要があると思っています。

一方で、今の地域の本質的な課題としては、実は地域住民が諦めてしまっていることのほうが本質的な課題だと言われてはいます。地域の衰退サイクルですね。課題が見つかって地域住民が諦めてしまって動かなくて担い手ができなくてより悪化していく。そういうことが、衰退している地域で起こっていることかなと。それを先ほどの事例で見ると、地域課題が同じように起こるのですけれども、関係人口がまずそれに立ち向かって、それに触発された地域住民と一緒に頑張ろうとなって課題が解決する。こういうのが「地域再生サイクル」と言うこともできるのではないかなと。なかなか課題がなくなることはないので、地域の再生主体が加速度的に形成されていって、課題が解決されて続けていく。そういう連続的過程を地域再生と定義したほうが、私としては、人口の維持、増やすとか地域の維持ということを目標に掲げるのではなくて、「生まれ続ける課題に対して課題が解決され続けるという連続的過程」にスポットを当てたほうがいいのではないかと。その際に、やっぱり主役である地域住民の主体性ということが最大の鍵になるのではないかと。今回は、私はこの主体性回復の鍵として関係人口というよそ者に注目していますが、これ以

外のアプローチもたくさんあると思っています。

関係人口やよそ者が前提でなくても、地域住民の主体性が回復できれば地域再生にはつながるのではないかと考えています。地域の維持・存続ばかりを絶対的な基準にするのではなく、もう少し実質的な側面に着目する必要があるのではないかと考えています。

時間になりますので以上ですけれども、もちろん限界と課題もあって、基本的に成功事例を扱っていますし、少数例だけなので、もう少し

他の事例も見ていく必要があるのではないかと考えています。あとは、外国人労働者が当てはまるのかという質問もかなりありますので、そこはもう少し丁寧に考えていかないといけないところですね。

あとは関係人口の定義についてもいろいろありますが、今回は主題ではないので、ということで先ほどの意見はこんな感じです。時間が過ぎてしまいましたが、私のほうからは以上です。ご清聴、ありがとうございました。